

結核ノ治療劑

(一) 化學的製劑

東京市療養所 小林 吉 人

「カルチウム」製劑

結核ニ「カルチウム」ヲ用ヒタルハリヒテル、アイゼンマンヲ以テ嚙矢トナスモ腸管ノ吸收疑ハレテヨリ其應用ヲ顧慮セラレタルガ一九一〇年 Chiri 及 Yanuske ノ兩人ハ炎症特ニ滲出機轉ニ關シテ「カルチウム」鹽ガ抑制スル作用アルコトヲ報告シ次デ一九一一年 Loo モ亦消炎作用ニ付キ論文ヲ發表セリ。又我國ニ於テモ佐多愛彦博士ハ一九一一年肺結核ニ「カルチウム」劑ヲ應用セラレテヨリ「カルチウム」ハ滲出機轉ヲ抑制シ酪變ヲ固結セルムル作用アリトシテ多數ノ人ニ應用セラル、ニ至レリ。

「カルチウム」劑ハ内服、注射、吸入等ノ方法ニヨリテ用ヒラルモ注射ニハ鹽化「カルチウム」、沃度「カルチウム」、「サルチル」酸「カルチウム」等ノ水ニ溶解シ易キモノ用ヒラル。其他ノ「カルチウム」酸ハ多ク難溶性ニシテ内服、吸入ニ用ヒラル。

「カルチウム」製劑ハ多數ニシテ枚舉ニ遑ナキ程ナルモ重ナルモノヲ舉グレバ次ノ如シ。
「クロールカルチウム」液 靜脈注射。

沃度「カルチウム」液、靜脈注射。

「アンチカロリン」沃度「ブROOM、サルチル」酸「カルチウム」液ニテ隔日靜脈注射。

「ブルモン」沃度「カルチウム」及「ヘキサメチレンテトラミン」ヨリ成リ五・〇乃至二〇・〇靜脈内注射。

複方「ヨードカルチウム」液 沃度「カルチウム」ト鹽化「カルチウム」トノ混合液ニシテ靜脈内注射。

「タカモール」 「サルチル」酸「カルチウム」液ニテ靜脈注射。

「ペクトール」 「サルチル」酸「カルチウム」、「キニーチ」、沃度ヨリ成リ靜脈注射。

「フチゾール」 「グアヤコール、ズルフオン」酸「クレオゾールカルチウム」ニテ注射ニハ三%溶液、内服ニハ一日〇・六

乃至一・〇。

「トリカルチウム」沃度「カルチウム」ニ數種ノ鹽類ヲ結合セルモノニテ靜脈注射。

「アキカルシン」 「カルチウム」、「ナトリウム」ニ沃度「キニーチ」ヲ配合セルモノニテ靜脈注射。

乳酸「カルチウム」 内服。

「グリセロ」磷酸「カルチウム」 内服。

炭酸「カルチウム」 内服。

「ベンツカルシン」 安息香酸「カルチウム」ニテ内服。

「ラミノール」 沃度「サッカリン」酸「カルチウム」ニテ内服。

「ヨーカルプス」 沃度「カルチウム」ト鹽化「カルチウム」トヲ含有スル舍利別ナリ。

「ヨードフェローゼ」 「フェローゼ」ニ沃度「カリチウム」ヲ抱合セルモノニシテ内服。

「ブノイミンカルチウム」 「メチレンクレオソート」ノ「カルチウム」化合物ニシテ内服。

「エバニン」末 「サポニン」ニ安息香酸「カルチウム」ヲ加フ、内服。

珪酸製劑

硅酸鹽ハ、癩痕形成ノ促進、白血球ノ増加等ノ作用ヲ有ストカ、或ハ進行ノ速カナル結核患者ノ屍體中ニハ硅酸ノ含有少シトイフ說等ヨリ結核ノ治療劑トシテ推賞セラレタルモ又、一方ニハ之レヲ應用シテ何等効ナシト云フ者アリテ其效力ハ未ダ一般ニ認メラル、ニ至ラズ。鴻上慶治郎氏ハ硅酸「コロイド」ヲ製出シ實驗セラレタルガ、家兔ニ對シテハ毒性強ク、喰菌現象昂騰ス。

臨牀的ニハ砒酸「コロイド」○・一%ノモノ一・〇珉ヲ以テ靜脈内注射ヲ行ヒタルモ著シキ效果ヲ見ザリキ。

銅製劑

銅ハ一八九四年、リュートンガ結核劑トシテ公表シテヨリ、其業績多數ニ上レリ、又近年フインクレル一派ハ銅ガ結核菌ニ對シテ強力ニ作用スト云フモ、フェルドハ之レニ反シ銅ハ結核菌ニ作用スルヨリ組織ニ對スル毒性ガ甚シク強シトナシテ之レヲ反駁ス、志賀博士ハ銅「サルバルサン」ヲ、ボードメルハ銅「レチチン」ヲ、古賀博士ハ「チアノクブロール」ヲ推賞セルモ又多クノ人ハ其效果ヲ認メズ。又、最近大阪ノ岩佐大治郎氏ハ銅ニ關スル業績ヲ發表セラレタリ。

「チアノクブロール」(古賀治療液)

其主成分ハ「チアン」加里ト銅トノ複鹽ニシテ「クッペルカリウム、チアニール、チアニット」ナリト云フ。零號ヨリ四號迄存シ靜脈注射ヲ行フ。

金製劑

金ハ甚ダ古クヨリ自然ノ形、或ハ無機鹽類トシテ用ヒラレタルガ一八九〇年ローベルト、コッホハ實驗的ニ金ヲ結核菌ニ作用セシメテ化學的療法ノ出發點ヲ定メタリ。コッホハ百萬倍乃至二百萬倍ニ稀釋セル「チアン」金化合物體ガ試験管内ニ於テ結核菌ノ發育ヲ抑制スル事ヲ證明シタリ、次デ動物試驗ニ進ミシガ良好ナル結果ヲ得ズシテ遂ニ方向ヲ變ジテ「ツベルクリン」ヲ造ルニ至リタリ。其後ブルック、グリック、ペンカノウイッチ、ユンケル、マイヤー、ホイブチル、ベットマン、ハウック等ノ諸氏金ヲ應用セリ。フェルドハ一九一一年ニ金ト「カンタリヂン」トヲ以テ實驗セリ。其他フェルドハ金「チオ」硫酸「ソーダ」ヲ用ヒテ實驗セリ。フェルドノ最初用ヒタルハ「カンタリヂール、エチーレンデ

アミン、アウリチアニット」ナリ。其後フェルドハ之レヲ改良シテ「アウロカタン」ヲ造レリ、「アウロカタン」ハ「モ
ノカンタリチール、チアミンアウロチアニット」ナリ。其後フェルドハ研究ノ歩ヲ進メ遂ニ「ベルツォール」核へ金ヲ結
合セシムル事ニ成功シ之レニ「クリソルガン」ト命名セリ。

次デ「クリソルガン」ニ類似セル「トリファール」出デ、近來メルゴーハ「サノクリジン」ヲ應用セリ。最近ニ至リ又「アウロ
ホス」ナル製劑ガ造ラレタリ。

Ⅰ 「クリソルガン」

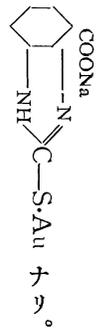
「クリソルガン」ハ一九一七年ニフェルドガ治療ニ應用シタルモノニシテ、「四、アミノ二、アウロメルカプト、ベルツォ
ール、一カルボンゾイレス、ナトリウム」



金ノ含量ハ五〇%ニシテ灰黄色ノ粉末ナリ、滅菌蒸留水ニ溶解シ靜脈注射ヲ行フ、「クリソルガン」ハ比較的毒性弱キモ、
最初〇・〇〇〇一瓦注射シ反應ナキ時ハ其倍量ヅ、使用シ無熱ノ患者ニ於テハ最初ヨリ〇・〇〇〇一瓦ヲ用ヒ、一乃至二週
ノ間隔ヲ置キテ増量シ最後ニハ〇・五瓦迄注射ス、フェルドハ又「ツベルクリン」療法ト併用スルコトヲ推奨ス。副作用ト
シテハ全身倦怠、頭痛、胃腸障礙、腎臟障礙、口腔粘膜炎症、皮下出血等ノ起ル場合アリ、特ニ其用量ヲ誤リタル時ニ
生ズト云フ。治療成績トシテハストウル、シュナイデル、バイニウス、フランケンタール、バンデリール、シュレーデ
ル等ハ效果ヲ認メ、ハ、リックマン、バックマイステル、ヘルムス、ウリチー、シエルレンベルグ、マイ、エル、リッ
クマン、エッセン等ハ無効或ハ病期ノ増悪ヲ認メタリ。

Ⅱ 「トリファール」

「トリファール」集成ハ「アウロチオ、ベンチミード、アゾールカンボンゾイレスナトリウム」



黄色ノ粉末ニシテ金ノ含有ハ四四%、水及ビ「グリセリン」ニ溶解シ弱「アルカリ」性反應ヲ呈シ、酒精及「エーテル」ニ不溶ナリ。滅菌蒸餾水ニ溶解シ靜脈内注射ニ用フ。

病期ニヨリ用量ヲ異ニスルモ、最初〇・〇二五乃至〇・〇五瓦ヨリ始メ、一週間ノ間隔ヲ置キテ〇・二瓦迄注射ス。

「トリファール」治療ニ應用シテシュレーデル、エル、リックマン等ハ比較的良好ナル結果ヲ得ウリチー、ツウエルグ、ガラツエル、クレムブレル等ハ無効ナリシト云フ、ツウエルグ、ガラツエル等ハ〇・〇〇一瓦ヨリ使用ス可キヲ主張ス、クレムブレル等ハ頭痛、惡感、下痢、蛋白尿等ノ副作用存スト記ス。

III 「アウロホス」

之レハ「アミノアリアルホスフニードン」酸ト次亞硫酸トノ金ノ複鹽ガ「ナトリウム」ト結合シタルモノニシテ白色無臭、水ニヨク溶解ス。金ノ含量約二五%ナリ、用量ハ一瓦ヨリ始メ一乃至二週間ノ間隔ヲ置キ一瓦ヅ、増量シ一瓦ニ至ラバ一瓦ヅ、増量シ、靜脈注射ニ用フ、治療成績ハ未ダ多ク發表サル、ニ至ラズ。

IV 「サノクリシン」

「サノクリシン」ハメルゴーノ造リシモノ、「ナトリウム、アウロチオズルファート」 $[S_2O_3Au]Na_2S_2O_3$ ニシテ白色針狀ノ結晶ナリ。水ニ容易ニ溶解ス。其四・五%ノモノハ血液ト等張ナリ。乾燥セルモノハ一年後ニ僅ニ變化スルモ水溶液ハ三乃至四週ニシテ變化シ黄色トナル。

「ナトリウム、アウロチオズルファート」ハ既ニ一九一三年ニフェルドガ實驗セルモノナルガメルゴーハ「サノクリシン」ハ金ガ三價ニテ酸素ト結合セル故フェルドノ用ヒタルモノヨリ可ナリト稱ス。尙メルゴーハ「サノクリシン」ハ直接結核菌ニ作用シテ之レヲ死滅セシムト云フ。用量ハ〇・〇五乃至〇・一瓦ヨリ始メ、一週間ノ間隔ヲ置キテ〇・一瓦宛増量シ、〇・七乃至一・〇瓦ニ至ル、全注射量ハ四・〇乃至六・〇瓦、約五・〇%ニ滅菌蒸餾水ニテ溶解シテ靜脈内ニ注射ス。

治療成績ハウー フリードマン、ヘニウス、チン、ウムベル等ハ有效ナルコトヲ認メ、クレムブレル、フリッツ、コッホ、ルブラン等ハ無效又ハ病期ノ増悪ヲ認メタリ。特ニ興味多キハルブランノ實驗ニシテ彼ハ癌ノ患者三名ニ「サノクリシン」(・五或ハ夫レ以上ヲ注射セシニ、メルゴーノ所謂殺サレタル菌ノ毒素ニヨル反應ナル發熱、蛋白尿、下痢、發疹等ヲ起シタルガ中二名ハ死亡セシ故之レヲ解剖セシニ全ク結核病竈ヲ見出サバリシト云フ。副作用トシテハ、發熱、胃腸障礙、腎臟障礙、皮膚及粘膜出血、嘔吐ヲ起ス。

(二)結核菌製劑

東京市療養所 加藤 三郎

此數年間結核特異刺戟療法ハ非常ニ盛ニ各方面ニ論議サレ、所謂特異刺戟製劑ナルモノガ一般ニ應用セラル、ニ至レリ乍併結核菌毒素作用ノ性狀ニ就テハ抑モ結核菌發見以來今日迄ノ此ノ久シキ間未ダ闡明サル、ニ至ラズ。而シテ結核菌毒素作用ノ性狀ノ不明ハ如何ニ結核免疫學ノ發達ヲ阻害スルニ至リシヤハ實ニ甚シキモノナリトス。之レ今日結核菌免疫ニ關シテ尙大ナル困難ヲ有スル所以ナリ。結核ニ於テハ血液内ニ於テ證明サル、液體免疫ノ外。細胞ノ關係セル細胞免疫ノ存在ヲ認ムルハ學者ノ說一致スル所ナリ、結核菌毒素水中ニ溶解スル成分舊「ツベルクリン」ノ如キ、產生毒素トセラレ此外又水ニ不溶性ノ菌體内毒素ナルモノアリ。之主トシテ反應作用即チ免疫生物學的反應ヲ起スモノトセラル。殊ニ此過敏現象ニ關シテハムフ氏等ノ一派ハ「バルチアールアンチゲン」ヲ以テ此過敏度 (Allergic) ヲ高メル目的ニ使用ス。フリードベルゲル氏ハ之レヲ結核特異毒素ニアラズト主張シ、モロー氏ハ交感神經ノ作用ニ歸ス。又ミユルレル氏ハ「ツベルクリン」含有物質ノ注射ニ就テハ白血球ノ低落即チミユルレル氏張力現象ヲ記シ、ラファウフ氏ハ「ツベルクリン」注射中ニ於ケル白血球像ノ變化ノ微妙ナル點ヲ以テ病性ノ豫後良、不良ヲ區別ス。其他又ハ補體結合試驗、喰菌現象、沈降反應、赤血球沈降速度等ヲ以テ論議セラル、ニ至レリ。